

Title	語文 第13輯 編輯後記/投稿規定/奥付
Author(s)	
Citation	語文. 13
Issue Date	1954-12-31
oaire:version	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/68471">https://hdl.handle.net/11094/68471</a>
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

# 編輯後記

「桂離宮を見ましたか」と聞かれて、「いえ、まだ」とでも答へたら、肩身のせまい思ひをしそうなところである。文化の国として、まことに慶賀の至りといふべきであらう。しかし、「あなたふとのけしきや」とて、いたづらに「信仰の気色」をかためることのなければ幸である。頃日、資朝卿ならぬ一農学士あり、見学を終って曰く、「汽車や汽船・航空機のなかった昔の貴族は気の毒なものでしたね。せまいところにあれだけ景観の妙をあつめて。情操の教へをして下さった恩師にすまない言葉ですけれど」と。率直のこの言や、よし、「あなたふとのけしき」は、ちかごろ政界はいはずもがな、古往今来、各処にこれを見る一率直士の冷水三斗の言、文芸文化の樣態にも示唆を加へて余あり。率直士をして、さらに、「この気色たふとくみえて候」といはしむるなれ。

さて、歳末匆忙の間、遅刊して居りました第十三輯をお送りいたします。本号には

六篇の掲載を見ました。

宇佐美氏の稿は、在満の歌論に堀川学の影響のあることを実証されたものです。小島博士は、猿蓑俳諧の「二番草」「油かすりて」の両句につき、農村の豊かな生活体験の中から、独自の解釈をくだされました。林氏の「鈴籥閑話」は、随想風にしたためながら、「奥の細道」における虚構と事実の問題を考察され、八木氏のは、大阪にゆかり深い和学者河漱蒼雄の著述を紹介されたもの、水田潤氏は、国語教育における評価の問題につき、前号の諸説の上にひとつの解決を提示されました。田中氏の「土橋家旧蔵書目録」は、前号につづき、連歌作品中、元禄末年までの分が排列されてあります。いづれも年末年始の間、御清読を願ひたいものです。

終りに、読者諸賢の多幸なる御迎春を祈り、併せて、今後の御支援をお願いして、編輯の筆を擱きます。

(大甕)

★ ☆ ★ ☆ ★ ☆

## 投稿規定

- 直接購読者は投稿することができる。
- 原稿の内容は国語・国文学、国語教育に関するものであること。分量は四百字詰原稿用紙二十枚以内とする。
- 原稿の送り先は「大阪府豊中市柴原、大阪大学文学部国文学研究室内、語文編輯委員」宛。
- 原稿の採否は編輯委員に一任のこと。
- 採用しなかった原稿は返送料が添付してあれば返送に応ずる。
- 一括購読者が投稿する際には代表者から紹介せられたい。
- ◆雑誌の寄贈・交換について
  - 雑誌の寄贈・交換は大阪府豊中市柴原大阪大学文学部国文学研究室宛に願いたい。
- ◆購読について
  - 購読希望者は発行所宛前金を添えて申込むこと。(送金は振替を利用されたい。)
  - 一部 五十円 送料八円
  - 一年分(四回分)二百円(送料共)
  - 五冊以上一括購読の時は一割引の上送料は不要とする。

